

事例 I-3-4

「ありのままを見てもらう」学生募集

☆本事例の中心人物

学長 阿久戸 光晴 氏、

広報企画部長 山下 研一 氏

～聖学院大学～

事例内容

【概要】

聖学院大学は、東京郊外の小規模大学にもかかわらず一度も定員割れを起こしていない。オープンキャンパスと情報公開に力を入れ、ありのままを見てもらうということを特徴とした募集活動を継続して展開しているが、他大学でも行われている募集活動の形態と大きな違いはない。それにもかかわらず、定員割れを起こしていないのは、なぜなのか、それをもとに取材をした。

【背景】

学校法人聖学院は、昭和 63 年に聖学院大学を開設後、以前より設置していた短期大学の改組を進め、平成 11 年には四年制大学へと完全に移行した。さらに、少子化による影響で大学間の競争が激化してきたため、教育改革を行うことが急務となった。そこで、14 年に教育憲章を宣言し、それをもとに「面倒見のよい大学、入って伸びる大学」というキャッチフレーズを掲げ、ふるい落とすための入試から、受験生の可能性を見出す入試への大きな改革を行った。そして、このことを受験生に知らせるために、教育と入試はつながっており、その入試は学生募集から始まるものであるという考え方から、教育改革と合わせて募集、入試といった入口の改革を行うこととした。この取り組みとして、当時では珍しかったオープンキャンパスを先駆けて行い、当時から情報公開にも力を入れた。

【取組内容】

「受験生が知りたいのは、大学のありのままの姿である。学生募集とは何であるかを考えた時、すべきことは、ありのままを見ても

らうことである。」と大学側は話す。それに合わせた募集改革を行うために、受験生の進路選択は高校卒業直前の一時期だけで決定するのではなく、1年なり2年なりをかけてじっくり決定していくものであると考え、それに合わせて年間を通しての募集活動プログラムを作成することとした。

そこで必然となったのが、改組当時世間ではまだあまり盛んではなかったオープンキャンパスである。現在、年約 20 回、4~3 月まで年間を通して開催している。オープンキャンパスに来てもらえるように、高校訪問も行う。

聖学院大学独自のオープンキャンパスの特徴としては、高校教員向けに行う日程があること、模擬講義を行い、それを FD の一環として位置づけていることが挙げられる。

まず、高校教員向けのオープンキャンパスでは、来てくれた高校教員一人ひとりに学生がガイドとして付く。学生には事前指導はせず、大学のいいところやそうでないところも含めてすべてをありのままに伝えてもらう。学生に事前指導なく任せられるのは、大学が日頃からきめ細やかな指導をしている自信と成果の表れであり、ありのままを見せるという大学側のポリシーがあるからであろう。

次に、模擬講義をオープンキャンパスで行う目的の中には、前述したように、募集という意味だけでなく、FD の機会を作るという意味もある。大学が受験生に伝えたいものは、この模擬講義に凝縮されているが、教員と職員が日頃から密にコミュニケーションを取っているので、教員も大学の教育方針をしっかりと理解し、模擬講義に臨んでいる。通常であればあまり授業を公開したがらない教員も、模擬講義を担当することにより、職員との話し合いの中で、教え方や授業の進め方に工夫を見出すことができるようになる。こ

の模擬講義は他の教員にも公開しており、他の教員にとっても参考となり、得るものが多いFDとなっている。

そして、学生募集において、オープンキャンパス以外にも、情報公開に力を入れた。入学者数や定員数、就職者数といったような、場合によっては学校にとって不利となるデータであっても、受験生にとっては知りたいデータである。聖学院大学では、受験生が大学選びをする時の参考になるように、こうした情報も含め、すべてをオープンにしている。

「DATA BOOK」という冊子に、入試、入学前準備教育、学部教育、キャンパスライフ、進路、財務データ、入試問題を項目別にまとめ、公開している。この冊子の作成も、大学のありのままを見せるといった聖学院大学の特長であり、先進的な取り組みである。

募集活動をするにあたっては、教職員同士、連携を取りながら、高校訪問は職員が、オープンキャンパスはメインの模擬講義として教員が中心となって行っている。また、目標を掲げて教職員が学内意識を共有している。

【結果】

「面倒見のよい大学、入って伸びる大学」といった教育憲章を掲げ、それを実践し、ありのままを見せるという募集活動を展開した結果、高校に面倒見の良い大学としての評判が広がり、大学を偏差値だけで選択しない生徒にとって、安心して入学できる大学という信頼を得るようになった。

また、募集時にありのままを見せていることにより、大学入学後のミスマッチがない、良い結果を生んでいる。民間の調査の「進路指導教諭が生徒に勧めるイチ押し大学」にて、「面倒見が良い大学」ランキングの上位を獲得した。

☆成功のポイント

学長の言う「愚直なまでの正直さ」が聖学院大学の特徴であり、これが高校や地域社会の信頼を得ることとなり、成功のカギとなっ

ているのである。すべての取り組みが、「オンリーワンフォーアザーズ（他者のために生きる個人）」の精神で行われており、「大学自身のためではなく、他者に奉仕する」という大学の姿勢が受験生に伝わり、学生募集の成功につながっているのである。

取材して感じたのは、聖学院大学の奉仕の姿勢が教職員だけでなく、学生にも浸透しているということである。地元を非常に大事にしており、地域住民からの評価も高い。

また、聖学院大学の特徴として、取り組み全般においてすべてを制度化、組織化するのではなく、少人数教育の良さを活かした「人間同士の深い関わり」を基本としていることが挙げられる。その結果として、取り組み全般が良い方向へ変わっていくとのことであった。

教職員相互の連携が日頃から取れており、教職員と学生との距離も近い。聖学院のスタンスとして、「学生のため」「市民のため」の大学であるということが前提にある。学長はほがらかな方で、学生や教育内容のこと話をときには穏やかで優しさにあふれていた。また、授業を受け持つ学生全員の名前を覚えているとのことであった。学内全体の雰囲気がとても温かい印象を強く受けたが、これは、学長の人柄によるものであり、それが聖学院大学の良さを作っていると感じた。

★今後の課題

現在、多くの大学でオープンキャンパスや情報公開といった同じような取り組みが行われるようになり、他大学との差がつかなくなってきたため、更なる検討が必要となる。

現時点では学生は集まっているが、安心はできないとのことであり、聖学院の最大の売りである面倒見の良さを、より広く知つもらうことが重要であり、これについて今後も強化していくことが課題である。

聖学院教育憲章

聖学院は間もなく創立百周年を迎えます。アメリカのミッショナリたちによる献身的奉仕を継承し、第二次大戦中は迫害をも耐え抜いて「神を仰ぎ人に仕う」精神を貫き、今日では幼稚園から大学・大学院、そしてアメリカに聖学院アトランタ国際学校をもつまでに至りました。

1945年の敗戦を機に「日本国憲法」と「教育基本法」が制定公布され、「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」（憲法97条）の恩恵を日本国民も享受するに至りました。聖学院は、この二つの根本規範が奇しくもキリスト教を基盤とする学院本来の教育目標と合致することを見いだし、その理想を実現することをもって学院の教育的使命としてきました。それは、「平和を維持し、專制と隸從、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたい」という国民的願望を教育によって達成するためです。

21世紀に入り、国の内外を問わず多くの深刻な問題が発生する中で、教育の重要性はますます広く深く認識されてきました。この時わが国と人類の将来にかかる教育の方向を誤ってはなりません。聖学院は過去百年の間守り続けてきた教育の基本精神を明らかにし、同時に現代の諸問題を取り組んで、いかによき未来を開拓すべきかを、過去三ヵ年に及ぶ聖学院教育会議で検討してまいりました。いまここにその成果をまとめ、聖学院教育憲章として宣言いたします。

【聖学院教育の根本目的】

聖学院は、日本国憲法（1946年制定）と教育基本法（1947年制定）に示された理想の実現を図り、将来の日本および国際社会に貢献する人間を育成することを教育の根本目的とします。

【聖学院教育の理念】

聖学院は、一人ひとりが神からかけがえのない賜物を与えられているという確信に基づき、それぞれの固有な賜物を発見することを助け、個人の人格の完成へ導く教育をします。聖学院教育はナンバーワン教育ではなく、オンリーワン教育であり、そしてそれはオンリーワン・フォー・アザーズ（他者のために生きる個人）の教育です。

【聖学院教職員の自己革新】

聖学院教職員は、「仕えられるためではなく、仕えるためにきた」と言われたキリストの模範にしたがい、人々に最も良く仕える者こそが社会を導いていくとの確信のもとに、サーヴァント・リーダーシップをもって責任を果たすため自己革新に努めます。

以上ここに宣言いたします。

2002年11月14日制定
聖学院教育会議